令和六年度　呉共済病院看護専門学校　入学試験問題（推薦）　国語

受験番号

【一】次の文（一）～（四）の傍線部の漢字と、後の各群の①～⑤の傍線部の漢字が同じものを、それぞれ一つずつ選び、番号で答えよ。

（一）会社のドウリョウと方針を協議する。

① 怪我のチリョウに専念する。
② 配達員から荷物をジュリョウする。
③ なだらかなキュウリョウを歩く。
④ 秋の高原はセイリョウな空気に包まれる。
⑤ 財務省のカンリョウが予算案を説明する。

（二）天然資源がコカツする。

① 日本経済にカツリョクを与える。
② 野球の試合で勝利をカツボウする。
③ 大声で部下をイッカツする。
④ 大切な説明をカツアイする。
⑤ 今後の方針についてホウカツ的な議論を行う。

（三）病気やけがの治療の費用をフジョする。

① 自分の家族をフヨウする。
② 遠方の職場にフニンする。
③ 競争を勝ち抜くためフセキを打つ。
④ 運転免許証をコウフする。
⑤ フソクの事態に対処できるようにする。

（四）家を建てるため傾斜地をサラチにする。

① 田舎でセイコウウドクの生活をする。
② 問題のあった大臣をコウテツする
③ 災害が起こらないようコウキュウテキな対策をする。
④ 優秀な技術者をコウグウする。
⑤ 自分の意見をキョウコウに主張する。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

わずか数羽しか残っていないトキは、国民の大きな関心を集めてきた。保護されたトキが卵を産み、ひながかえって育つ過程は、マスコミに大きく報じられた。二〇〇三年十月、日本最後のトキが死亡した。ある生物が地球上から消え去ってしまうという事実は心に訴えかける力がある。少し想像力のある人なら、トキの絶滅を招いたのは、環境変化だろうということに思いいたるだろう。実際にはトキのように個体数が減ってしまった生物を何羽か増やしたところで、もとから棲んでいた場所には帰せない。絶滅しそうな生物を保護しても、自然というシステムからはすでに切り離されている。(ア)自然というシステムから見れば、絶滅したのと同じことである。

絶滅の危機を叫ぶと、逆にその意味が薄れる可能性がある。具体的には、トキの保護に懸命な皆さんのようすが報じられると、「なぜあんなに必死になるのだろう。トキが死に絶えたって、人間の生活に関係ないよ」と考える人も出てくるはずである。(Ⅰ)メダカも同じである。メダカが絶滅しそうだといわれても、「童謡には歌われているけど、(イ)食料になるわけではないし、絶滅したって困らない」と考える人もいると思う。(Ⅱ)こういう発想が出てくるのは、ある生物が絶滅しても、それが自分にどう跳ね返ってくるか、それが見えないからである。

じつはそこに多様性の意味がある。自然はたくさんの構成要素が複雑に作用しあう巨大なシステムである。システムというものは本来、それを壊そうとする力が働いても動かない、安定なものである。ある生物が絶滅しても、なにも起こらないようにみえるのは、自然というシステムがいわば「自動安定化機構」をもっているからである。(Ⅲ)しかし、システムにも弱点はある。いわば思いがけないところをつかれたとき、一気に崩壊することもありうる。ピストルの弾ですら、人を殺すのである。

トキが自然界から(ア)カクリされても、いまのところ、自然というシステムはさほど影響を受けていない。しかし別の生物だったら、破綻にいたることがあるかも知れない。(Ⅳ)(ウ)自然というシステムは、たくさんの生物が影響しあって微妙なバランスを保っている。だから、どれかが欠けたときにどんな影響が現れるかは、よくわからない。そのときの状況によって左右されることもあるかも知れない。いまの場合、トキの影響は目に見えるほどではなかったが、別の条件の下だったらもっと深刻な事態を招いたかもしれない。あるいは、長い時間が経ったあとで、大きな影響が現れるかもしれない。(Ⅴ)システムを構成する何かが欠けたとき、どんな影響がいつ現れるかは、予測がつかない。

これを逆向きにいうと、システムを構成する要素は、システムを維持するためにいつもなんらかの役割を果たしている可能性があるということになる。だから、システムの構成要素をいたずらに減らすことは慎むべきなのである。自然の構成要素である生物の [(a)] を保つ必要があるのは、そのためでもある。

実際に日本で、ある生物が絶滅したために、システムが大きな影響を受けた例がある。オオカミである。日本には昔、オオカミがたくさんいた。それは「山犬」という地名が残っていることからも知れる。しかし、オオカミは明治時代に絶滅した。人間に追われて棲む場所がなくなっていったことと、犬の伝染病であるジステンパーに(イ)カンセンしたことが原因だという。最後まで残ったのは、おそらく山の深い紀伊半島であろう。

(エ)オオカミがいなくなれば、オオカミに食われていた動物が増える。その最たるものがシカである。奈良のシカは有名だが、東北でも、北海道でも、日本のあちらこちらでシカが増え続けている。最近では増えすぎてさまざまな(ウ)ヘイガイが出ている。道路に飛び出してきて運転が危ないし、牧場に入り込んで牧草を食べてしまう。生態系への影響も深刻である。自然というシステムのバランスを考えれば、人間がオオカミの代わりをしてシカを減らさなければならない状態である。それなのに、まだシカは手厚く保護されている。

そこには、シカを殺すのはかわいそうだという情緒的な発想や、自然はそのままにしておくべきだという環境原理主義が働いている。しかし、天敵がいなくなったり、ある動物だけを保護したりすれば、システムのバランスが崩れ、別の生物が影響を受ける。システム全体のバランスを保つには、ここでも、上手に自然に手を加える(オ)「手入れ」という思想が必要なのである。かわいそうだから殺さないというのは、システム全体から見れば、必ずしもプラスにならない。

虫の世界でも、こうしたことは頻繁に起こっているはずである。しかし、人間の生活にあまり関係がないので、気づかれない。昔は害虫の大発生がよく問題になったが、最近はすぐに農薬を撒いてしまうので表に出てこない。そもそも「害虫の大発生」というが、当の虫にしてみればシステムの条件変化に(エ)テキオウしただけのことである。イナゴ（サバクトビバッタ）は乾燥した気候が続いて、餌が不足してくると、翅の長いタイプが生まれて大旅行をする。餌を求めての集団飛行が大発生と呼ばれたのである。

自然がシステムであるとわかれば、ある生物が別の生物よりも大切だとか、この生物は要らないという発想は出てこない。どの生物も生きていることが大切だとわかるはずである。人間にとって有用か無用かという判断基準で分けるから、害虫と益虫という分け方が出てくる。だが、人間が害虫だと考えようが、益虫だと考えようが、それとは関係なく虫は自然のなかで生きている。自然というシステムを構成しているという点では、どの虫も、ある意味で欠かせない存在なのである。

二十世紀の科学は、システムという視点を抜きにしてさまざまな問題を扱ってきた。システムの構成要素を一つ一つ取り上げ、それを追求してきた。そして、要素に分ける手法はコントロールのための科学を進展させるのに役立ち、一定の成果を上げてきた。しかし、環境問題というシステム全体の問題に取り組むには、この手法はあまり役に立たない。個々の要素をいくら追及しても、システムは理解できないし、システムがどのように動いていくのかもわからないからである。これからの科学は、システムを扱えるものにならなければならない。

（養老孟司「いちばん大事なこと」による）

問一　二重線部㋐～㋓のカタカナを漢字に直せ。

問二　本文には次の文が抜けている。これが入る箇所として最も適当なものを、本文中の（Ⅰ）～（Ⅴ）から一つ選び、記号で答えよ。

それは、トキがシステムにとって重要でなく、別の生物が重要だという意味ではない。

問三　傍線部（ア）「自然というシステムから見れば、絶滅したのと同じことである」とあるが、なぜこのように言えるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤から一つ選び、番号で答えよ。

① 環境の変化に対応できないものが自然界から消えていくのは、当然のことだから。
② 絶滅寸前の状態を手厚く保護しても、これまで成功した例は全く見られないから。
③ もとどおりの環境に戻れないようでは、他の生物と共に生きることができないから。
④ 人間の手を借りなければ生きられない生物は、いずれ滅んでいく運命にあるから。
⑤ 個体数が急激に減少している生物は、やがて絶滅する場合が多いから。

問四　傍線部（イ）「食料になるわけでもないし、絶滅したって困らない」という発想はどのような考えによるものか。本文中から、句読点を含む十五字以上、二十五字以内で抜き出せ。

問五　傍線部（ウ）「自然というシステムは、たくさんの生物が影響しあって微妙なバランスを保っている」とあるが、このことを具体的に説明した次の文の空欄に、適当な語句を十七字以内で補って文を完成させよ。

オオカミが存在することによって、シカの数が［　　］ということ。

問六　傍線部（エ）「オオカミがいなくなれば、オオカミに食われていた動物が増える。」に関連して、生物群内で食うものと食われるもののつながりを何というか。「食物」という語を含めて、漢字四字で答えよ。

問七　傍線部（オ）「手入れ」の具体例として最も適当なものを、次の①～⑤から一つ選び、番号で答えよ。

① シカのように弱い立場の動物を保護すること。
② オオカミの役目を補って人間がシカを減らすこと。
③ シカとオオカミの関係に手出しをせず見守ること。
④ 危険なオオカミを排除するための工夫をすること。
⑤ シカが食べる食物を人間がシカに与えること。

問八　空欄［(a)］には、様々な生物が異なる環境で生息し、互いの違いを活かしながら、つながり調和していることを意味する語が入る。この語を漢字三字で答えよ。

【三】次の文章は、ある中学校の吹奏楽部で夏の地区大会さらには県大会をめざして練習する生徒たちについて述べた小説の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

譜面をパートごとに練習して、セクションごとに音として仕上げていくのは、山から石を切り出す作業だが、そのごろごろした石がようやくしっかりとした石組みになろうとしていた。森勉(注1)が細やかに出す指示は、石と石の接触面をぴったりと合わしていく仕事だった。

この日、何度目かで「くじゃく」(注2)をさらっていた時、克久はばらばらだった音が、一つの音楽にまとまる瞬間を味わった。スラブ風の曲だが、枯草の匂いがしたのである。斜めに射す入り陽の光が見えた。それは見たことがないほど広大な広がりを持っていた。(ア)いわく言い難い哀しみが、絡み合う音の底から湧き上がっていた。悔しいとか憎らしいとか、そういういらいらするような感情は一つもなくて、大きな哀しみの中に自分がいるように感じた。［(a)］、A音が音楽になろうとしていた。地区大会前日だった。

オーボエの鈴木女史(注3)の苦情から有木部長(注4)が解放されたのは、地区大会の翌日からだ。一年生にもようやく自分たちが求められているものがどの水準にあるかが解ったのだ。ベンちゃんが初期の頃は苦労していた部員の統制は、今では指揮者を煩わせることなく鈴木女史のようなメンバーで守られているのだから有木部長もそうそう㋐閉口という顔をできなかったが、とにもかくにも苦情を聞かずにすむのは喜ばしい。「音になってない」という森勉の決まり文句をはじめとして、「やる気があるのか」とか「真面目にやれ」とか言われる理由がのみ込めたのだ。B怒られるたびに内心で「ちゃんとやってるじゃないか」とむくれていた気持ちがすっかり消えた。

スゴイ学校は他にもいくらでもあった。

今年こそは地区から県大会を突破しようという気迫で迫ってくる学校があった。

その中でも、課題曲に「交響的譚詩」(注5)を選んだある学校の演奏は、克久の胸のうさぎ(注6)が躍り上がるような音を持っていた。

花の木中学校とは音の質が違った。花の木中学はうねる音だ。(b)、その学校の音はもっと硬質だった。

「スゲェナ」

有木がつぶやいた隣で克久は拳を握り締めた。

「(イ)和声理論の権化だ」

密かに音楽理論の勉強を始めていた宗田がそう言い放つのも無理はない。

最初のクラリネットの研ぎ澄ました音は、一本の地平線を見事に引いた。地平線のかなたから進軍してくる騎兵隊がある。木管は風になびく軍旗だ。金管は㋑四肢に充実した筋肉を持つ馬の群れであった。打楽器が全軍を統括し、西へ東へ展開する騎兵をまとめあげていた。

わずか六分間のこととはとても思えない。

遠く遠くへ連れ去られた感じだ。

克久の目には騎兵たちが大平原に展開する場面がはっきり見えた。宗田の脳髄には宇宙工学で必要とされるような精密機械の設計図が手際よく作製される様子が浮かんでいた。宗田は決して口には出しては言わなかったが、最近、人が人間的なと呼ぶような感情に嫌悪を感じ始めていた。

うんと唸った川島が、

「負けた」

といった一言ほど全員の感情を代弁している言葉は他にはなかった。

「完成されているけど、音の厚みには欠けるよ」

「負けた」という全員の感情、(c)一年生たちの驚きを代弁した川島の一言だけでは、出番を控えていた花の木中学吹奏楽部は気持ちの立て直しはできなかったかもしれない。川島の唸り声は全員の気持ちを代弁していたが、気持ちを向ける方向の指示は持っていなかった。

「完成されているけど、c音の厚みには欠けるな」

こんなことを言うOBがいなかったら、自分たちの出番前だということも忘れただろう。

「やっぱり、中学生はね。技術は良くても音の量感には乏しいよ」

「うちはまあ、中学生にしては音の厚みはあるしさ」

現役の生徒の後方の席でOBたちはこんな批評をしていたのだ。昨日まで、鳥の鳴き声みたいに聞こえたOBたちの言葉が、今日はちゃあんと人間の話し声に聞こえる。

これは克久にとって、驚きに値した。

克久が一番間抜けだと感じたのは百合子(注7)だった。なにしろ、地区大会を終わって家に戻って最初に言ったのは次の一言だ。

「やっぱり、強い学校は高い楽器をたくさん持っているのね」

それを言っては(ウ)みもふたもない。言ってはならない真実というものは世の中にはある。それに高価な楽器があれば演奏できるというものでもない。演奏する生徒がいて、初めて高価な楽器がものを言うのだなんてことを、克久は百合子に(ウ)懇切丁寧に説明する親切心はなかった。

(中沢けい「楽隊のうさぎ」による)

(注) 1 森勉―花の木中学校の音楽教師。吹奏楽部の顧問。部員たちからは「ベンちゃん」と呼ばれている。
2 「くじゃく」―ハンガリーの作曲家コダーイがハンガリー民謡「くじゃく」の旋律をもとに作った曲。
3・4 鈴木女史・有木部長―ともに吹奏楽部の上級生。
5 「交響曲譚詩」―日本の作曲家露木正登が吹奏楽のために作った曲。
6 克久の胸のうさぎ―克久が、自分の心の中にいると感じている「うさぎ」のこと。
7 百合子―克久の母。

問一　二重線部㋐～㋒にふりがなをつけよ。

問二　空欄 (a) ～ (c) に入れるのに最も適当な語を、次の①～⑦の中から一つ選び、番号で答えよ。

① そして　② なぜなら　③ ところが　④ とりわけ
⑤ つまり　⑥ やはり　⑦ とにかく

問三　傍線部（ア）～（ウ）の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、番号で答えよ。

（ア）いわく言い難い

① 言葉にするとすぐに消えてしまいそうな
② 言葉にするのが何となくはばかれる
③ 言葉では表現しにくいと言うほかはない
④ 言葉にしてしまってはまったく意味がない
⑤ 言葉にならないほどあいまいで漠然とした

（イ）和声理論の権化

① 和声理論で堅固に武装した演奏
② 和声理論を巧みに応用した演奏
③ 和声理論を的確に具現した演奏
④ 和声理論にしっかりと支えられた演奏
⑤ 和声理論で厳しく律せられた演奏

（ウ）みもふたもない

① 道義に照らして許せない
② 現実的でなくどうにもならない
③ 大人気なく思いやりがない
④ 露骨すぎて話にならない
⑤ 計算高くてかわいげがない

問四　傍線部A「音が音楽になろうとしていた」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えよ。

① 指揮者に導かれて克久たちの演奏が洗練され、楽曲が本来もっている以上の魅力を克久に感じ始めさせたこと。
② 練習によって克久たちの演奏が上達し、楽曲を譜面通りに奏でられるようになったと克久に感じさせはじめたこと。
③ 各パートの発する複雑な音が練習の積み重ねにより調和し、圧倒するような迫力を克久に感じ始めさせたこと。
④ 各パートで磨いてきた音が個性を保ちつつ精妙に組み合わさり、うねるような躍動感を克久に感じさせ始めたこと。
⑤ 指揮者の指示のもとで各パートの音が融け合い、具象化した感覚や鈍化した感情を克久に感じさせ始めたこと。

問五　傍線部B「怒られるたびに内心で『ちゃんとやってるじゃないか』とむくれていた気持ちがすっかり消えた」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えよ。

① 日々の練習をきちんと積み重ねているつもりでいた一年生だったが、地区大会で他校の優れた演奏を聴いて、めざすべき演奏のレベルが理解できたと当時に、まだその域に達していないと自覚したから。
② 地区大会での他校の演奏を聴いて自信を失いかけた一年生だったが、演奏を的確に批評するOBたちが自分たちの演奏を音に厚みがあると評価したので、あらためて先輩たちへの信頼を深めたから。
③ それまでばらばらだった自分たちの演奏が音楽としてまとまる瞬間を地区大会で初めて経験した一年生は、音と音楽との違いに目覚めると同時に、自分たちに求められている演奏の質の高さも実感したから。
④ 地区大会で他校のすばらしい演奏を聴いて刺激を受けた一年生は、これからの練習を積み重ねていくことで、音楽的にさらに向上していこうという目標を改めて確認し合ったから。
⑤ 自分たちとしては十分に練習をしてきたつもりでいた一年生だったが、地区大会で他校の堂々とした演奏を聴き、自信をもって演奏できるほどの練習はしてこなかったと気づいたから。

問六　傍線部C「音の厚みには欠ける」となぜ思ったのか。本文中から七字以上、十二字以内の語句を抜き出せ。